

秋本番 その3

秋はいろいろな思いを人に起こさせる。

徒然草 第29段 [要約]つい昔を思い出してしまう

原文

静かに思へば、よろづ過ぎにしかたの恋しさのみぞ、せむかたなき。

人静まりて後、永き夜のすさびに、何となき具足とりしたため、残し置かじと思ふ反古など破りすすつる中に、亡き人の手習ひ、絵かきすさびたる見出でたるこそ、ただその折の心地すれ。

このごろある人の文だに、久しくなりて、いかなる折り、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなくてかはらず久しき、いと悲し。

現代語訳

心静かに思い出にふけると、何事につけて、過ぎた昔の恋しさだけがどうしようもなくついつつくる。

人の寝静まった後、秋の夜長の暇つぶしに、雑多な身の回りの品々を整理して、残しておく必要のない書き損じの紙などを破り捨てる中に、今は亡き人の文字や絵を見つけると一瞬にして心はその人が生きていた当時に戻ってしまう。

今生きている人の手紙でさえ月日がたって、これを貰ったのはいつどんな時だったろうと思いをめぐらすうちに、しみじみとした気分引き込まれる。

故人の使い慣れた道具類が人情とは無関係にずっと当時のまま残っているのを見るのはとてもせつないものだ。

秋の夜長に、机の周りを片付けていると、昔旅に出ていたときに買った革製の表紙(図柄はドン・キホーテとサンチョパンサ)のついたメモ用紙が引き出しの中から出てきて、マドリードのお土産屋で、そのメモ用紙を30冊買ったところ、店主がおもむろに店を閉めだしたことを思い出した。

どうしたのか聞いてみると、三日分ぐらいの売り上げだからもう店を閉めてゆっくり休むんだということだった。30冊で1万5千円ぐらいだったので、その暮らしぶりと人柄がわかり、スペインという国はなんてすばらしいのかと感動したのを思い出す。

マドリードの近代美術館には、ゲルニカの絵が展示され、そのわきに自動小銃に弾薬を装填した兵士が二人無表情で立っていたのを見た後だったから、余計に驚いた。

I`d like a sandwich. How much?
が通じたレストランも素敵だった。